



及ぼした影響

只見町ブナセンター館長

鈴木 和次郎

7月末の記録的な豪雨は、只見町に甚大な被害をもたらしました。只見の自然環境（森林そして河川）も、また、今回の豪雨災害により大きな影響を受けています。現在、災害復旧に向け、様々な取り組みがなされていますが、只見の生活地域を取り巻く自然環境の変化を知ること、今後の復旧と町づくりにとって、重要な意味を持つものと考えます。そこで、只見町ブナセンターは、今回の豪雨で最も影響を受けたと思われる河川環境について伊南川流域を中心に調査を行ってきました。

今回の豪雨により伊南川の水位は通常時より4〜5メートル上昇し、流れの中心付近や中洲では、ヤナギ林がなぎ倒され、樹冠が飛ばされ樹皮が剥がされ、さながら白骨化した樹木群が残されました【写真1】。

一方、河岸では砂礫が1メートル以上も堆積しましたが、ヤナギ自身は根元部分が埋もれたものの、直接的な被害は受けていません。伊南川には希少種ユピソヤナギを含めたヤナギ林が連続的に分布していますが、ユ



写真2：洪水2カ月後には、シロヤナギの生き残った部分から多数の萌芽枝の発生が見られる



写真1：洪水により白骨化したシロヤナギ林

豪雨災害が河川環境に

ビソヤナギは比較的比高が高い場所に分布する結果、心配されたような集団の著しい縮小、消失といった事態は避けられませんでした。

また、大きな被害を受けたシロヤナギについても、洪水から3カ月あまり過ぎた現在、根元付近の幹から盛んに萌芽枝が発生し、再生の兆しが見られます【写真2】。

また、これらヤナギの洗掘された根系を見ると、これまで一度々、河川攪乱により被害をこうむりながらも再生してきた歴史を見ることが出来ます。ヤナギが河川攪乱に強いことを示す証です。

○・・・・・・・・・・・・・・・・○

只見町ブナセンターは同時に、河川に押し出された流木の調査も行っています。塩ノ岐川と伊南川の出合い付近の調査結果では、流木の主要な樹種はサワグルミとスギで、いずれも根を持ち、樹皮が剥がれた状態で流木化していました【写真3】。こうしたところから、斜面下部、水辺域に成立したサワグルミ林やスギの人工林が、溪岸侵食や土石流により押し出され、流木化したものと考えられます。中には1メートルを超えるブナの

大径木も見られるところから、相当の距離を流下してきたものと思われれます。

○・・・・・・・・・・・・・・・・○

河川周辺のヤナギ林については、治水利水、生物多様性の保全などの視点から、その管理のあり方について、論議のあるところですが、伊南川に連続的に成立するヤナギ林について言えば、今回の洪水において、流木その他の流下物を補足し、また河岸侵食を抑えるなど一定の好適な役割を果たしているように見られます【写真4】。今後は、新潟大学と連携し、河川攪乱後が水辺林に及ぼす影響、さらに被害を受けた林分の再生過程などを詳しく調査する予定です。

○・・・・・・・・・・・・・・・・○

今回の集中豪雨は、地域社会に甚大な被害をもたらしたと同時に、河川周辺を中心に只見の自然環境にも少なからず影響を及ぼしました。

一方で、只見の豊かな自然が、こうした自然災害を最小限に抑えたいとどめたように見えます。只見の自然の価値をこうした方面からも見直していく必要があると思われれます。



写真4：比高の高い氾濫原に成立するユビソヤナギ林は、多量の土砂、流木を補足した



写真3：今回の豪雨は、大量の流木を発生させた（塩ノ岐川と伊南川の合流付近）